

# 総合的に子どもの発達を促す保育内容の展開

## Childcare Contents to Foster Child Development in Integrated Instruction

次世代教育学部こども発達学科

大野 鈴子

OHNO, Reiko

Department of Child Development

Faculty of Education for Future Generations

キーワード：保育内容，総合的な指導，遊び，発達，系統的，

**Abstract:** According to the course guidelines for kindergartens and child centers in Japan, teachers are to provide integrated instruction through children's play. In order to foster child development in this integrated manner this paper examines the contents of the system of childcare to allow for full understanding. Analyzing case studies the paper attempts to clarify how children are to be instructed and aims to develop an instructional method. Finally, we conclude by showing that childcare workers need to treat one activity from various perspectives to take account of the different stages of child development, in addition to invention and instruction for children to realize their own feelings.

**Keywords :** childcare content, integrated instruction, child's play, child development, systematic

### 1 はじめに

保育内容とは、「幼稚園や保育所における保育の目標を達成するために展開される生活のすべてであり、望ましい人間形成の媒体となるものといえる」（森上・柏女，2011，P52）と保育用語辞典に書かれている。また、保育士養成課程の「保育内容」には、「保育所において保育の目標を達成するために展開される全ての内容を意味するものであること」「5領域を視野に入れた教科とそれらの教科を統合する保育内容総論から構成されることが望ましい」とされている。保育の内容は「発達の側面から」5つの領域で示されているが、「相互に関連」をもつこと、「総合的に指導」「展開」されるものであることも示されている。

5領域は、心身の健康に関する領域「健康」、人とかかわりに関する領域「人間関係」、身近な環境とかかわりに関する領域「環境」言葉の獲得に関する領域「言葉」、感性と表現に関する領域「表現」がある。これらの領域は、小学校の教科指導とは異なるもので、幼稚園や保育所では、遊びを通しての総合的な指導が求められている。

しかし、活動を細分化して時間割を組んで保育内容を指導したり、経験や活動を選択・配列して保育の計

画を立案し、その計画通りに保育を展開したりしている園が見られる。また、保育者の子どもの姿からの読み取りが一方的であったり、浅かったりするため、適切な援助につながらず、主体的に遊びを進める楽しさが味わえないでいる現状がうかがえる。

このような状況から、2008年に改訂された、幼稚園教育要領や保育所保育指針に、保育は「遊びを通して総合的に行うこと」を基本とすることが記されている。教育要領においては、幼稚園教育の基本に

「幼児の自発的な活動としての遊びは、心身の調和のとれた発達の基礎を培う重要な学習であることを考慮して、遊びを通しての指導を中心として第2章に示すねらいが総合的に達成されるようにすること」（文部科学省，2008，P23）

と記されている。また、保育指針においては保育の方法として、保育の目標を達成するために留意して保育しなければならないこととして、

「子どもが自発的、意欲的に関われるような環境を構成し、子どもの主体的な活動や子ども相互の関わりを大切にすること。特に、乳幼児期にふさ

わしい体験が得られるように、生活や遊びを通して総合的に保育すること」(厚生労働省, 2008, P23)

と記されている。

なぜ、保育においては遊びを通しての総合的な指導が求められるのか。それは、乳幼児の心身の発達が未分化であることによると考える。生活や遊びの中で、見ること、聞くこと、動くこと、感じること、考えること、表現することなどが一体となって経験される。そして、遊びを展開する中で、心と体全体を働かせて活動し、様々な側面の発達にとって必要な経験を身につけていくからである。つまり、乳幼児期は、様々な能力が個別に発達していくのではなく、相互に関連し合い、総合的に発達していくのである。

このような乳幼児の総合的な発達を促す保育内容は、どのように捉え、どのように指導し、どのように展開していけばよいのかを明らかにしていきたい。

## 2 遊びを通した総合的な指導

「遊びを通した総合的な指導」ということがいつごろから言われ、現在に至っているのかを考察し、課題解決につなげていきたいと考える。

### (1) 「幼稚園真諦」から

倉橋(1934)は、「保育案と保育内容」に総合的な保育内容について書いている。

「八百屋が主題として選ばれたとしますと、それから先は、店の物の選択になるのですが、これら、子供の興味の外に、どれだけの教育目的を実現していく可能性を含んでいるかということ、別に考えなくてはなりません。八百屋ですから、とにかく、果物を並べましょう。野菜を置きましょう。その果物、野菜などを置きますならば、そこにそれぞれの保育内容が行われるのは当然です。あるいはまたその八百屋に看板をかけた、広告のビラを書いたり、いろいろと果物の名前を札に書いたりしますと、ここに保育事項としての文字の問題が入ってきます。あるいは品物なり、売り上げについて勘定することもあって、保育事項として数の問題も入ってきましょう。あるいは店の品々を作るについて、製作の問題が入ってきます。こういう意味で、いろいろな面に従ってど

ういう教育が出来るかということも、その中に配当されるのであり、それが出来るだけ多い方が、誘導保育案としての価値を多くするわけでしょう。」(倉橋, 1934, P75)

と遊びを通した総合的な指導について、具体的にわかりやすく書かれている。

この中に、主題を、「何かしら子どもの生活にまとまりを与えるようなもの」とし、保育内容を保育事項という言葉を使って表している。また、保育事項は出来るだけ多い方が保育案としての価値を多くすることも表している。78年前に総合的な指導は保育者に投げかけられて現在に至っている子どもの実態に即した重要な指導のあり方であると考ええる。

### (2) 「総合性と系統性」との関係

森上(1978)は、

「総合的保育では、子どもが取り組む経験や活動は生活経験に即した総合的なものであることが必要です。しかし、その経験や活動をいきいきと展開できるようにし、しかも、その中でどのような発達が促されているかを、保育者がきちんと確認するためには、保育者の側で子どもの心身の諸側面の発達の系統性や教材(経験や活動、あるいは遊具・教材など)の系統性などが、しっかりとおさえられていることが必要であると言われていきます。そうすると、子どもの取り組む活動は総合的であるにもかかわらず、保育者の頭の中には分析された系統性が必要であるということで、活動の総合性と分析ないし系統性の二面が保育にはあるということになります。」(大場, 海, 平井, 本吉, 森上, 1978, P8)

と書かれ、系統性の部分に触れ、保育者の専門性が問われている。

総合的に保育を進めていく中で、“喜んで”とか“楽しく”“いきいきと”などを重視してきたので、保育がムードに流され、その中で一人一人の子どもがどのように活動し、どのように発達しているのかの確認ができていないのではないかとこの点が課題としてあがっている。また、保育者は、心身の諸側面の発達がどのように積み重ねられてきているのかを筋道だてて考える必要がある。しかし、領域は、保育者が保育を筋道だてて考えるためのものであって、子どもを領域

別に指導するものではないということも課題としてあげられている。

このころの保育者は、子どもの活動は総合的で、保育者の頭の中には分析された系統性が必要であると言われ、理想を求めつつ保育に悩んでいた時期である。

### (3) 幼児理解・総合的に指導する力

2002年に、文部科学省「幼稚園教員の資質向上について－自ら学ぶ幼稚園教員のために」(報告)の、幼稚園教員に求められる専門性の中に、幼児理解・総合的に指導する力として次のように書かれている。

「幼児は、自発的な活動である遊びを通じて、心身全体を働かせ、様々なことを経験しつつ、理解力、言語表現力、運動能力、思考力、社会性、道徳性などの多様な能力や性質について、相互に関連させながら総合的な発達を遂げるものである。このような幼児の発達段階や発達過程を、その内面から理解し、生活の中で幼児が示す発見の喜びや達成感を共感をもって受け入れる、といった幼児理解が基本として重要である。そして、幼児の総合的な発達を促すため、主体性を引き出しつつ、遊びを通じて総合的に指導する力が、専門性として求められており、幼児期の特性に応じて指導する力として重要である。」(文部科学省、2002、P6)

としている。

専門性として、子どもを内面から理解し、総合的に指導することが求められている。そのためには、発達段階や発達過程に応じた幼児理解に向け、生活の中での喜び、葛藤、達成感などを受け止め、共感したり共に考えていったりする姿勢が基本として重要であるとしている。

## 3 総合的に子どもの発達を促すには

「遊びを通した総合的な指導」についての現在に至るまでの経緯を踏まえ、総合的に子どもの発達を促すには、次のようなことが大切であると考えられる。

### (1) 総合的な保育内容

- ・子どもの生活経験に即した、具体的で総合的な経験や活動でなくてはならない。
- ・保育者は、子どもの興味や欲求をたえず考えるこ

とと、複数のねらいを頭の中にもっているということが大切である。

- ・子どもたちが喜んで、自分から活動を展開する中でさまざまな保育内容が達成される。

### (2) 発達を系統的に捉える

- ・個々の子どもの姿をていねいに読み取っていき、個々の「成長の履歴」としての系統性を見る。
- ・子どもの活動を時間をかけて見、保育者の援助を基盤にして活動の系統性を探る。
- ・5領域の保育内容を、発達段階に応じて、それぞれに系統的に捉え、把握しておく。

### (3) 発達段階や発達過程をその内面から理解する

- ・活動がどのように生まれ、その活動にどのように取り組んでいくかを、活動の展開と共に一人一人の思いへの理解から捉えていく。
- ・喜び、葛藤、達成感などを共感的に捉え、情緒、思考力、道徳性など心理面での発達を個々に把握していく。

## 4 事例と考察

### (1) 実践場所、対象

岡山市内A幼稚園	2年保育4歳児	25名
岡山県内B幼稚園	3年保育5歳児	32名

### (2) 事例

事例1 「自分でわかってる！」

－砂場で見られたA児の姿－

2年保育4歳児 5月～6月

園生活にも少しずつ慣れはじめてきたこの時期は、一人一人の子どもが自分の思いをしっかりとだして、自分のしたい遊びに思い切り取り組んでほしいと考えている。

この時期は、ゆったりとした遊びの時間を確保するとともに、子どもが安心して遊ぶことができる場の確保や、共感的な保育者の姿勢が大切であると考えられる。

これは、日々の生活の中でよく見られるような、砂場での遊びにじっくりと繰り返して取り組むA児の姿に寄り添った事例である。

#### ①「水が土になった！」

5月22日

A児は、水をいっぱい入れたバケツに、スコップでどんどん砂を入れる。砂はあっという間に水に埋まっ

ていく。それを繰り返している時、砂が埋まらず山になった。すると、その瞬間、「わっはっはー！」と大喜びで笑うA児。その後も砂を重ねる。「水が土になった！」とA児。「ほんとだな！水に勝ったね！」と保育者。「たくさん砂入れるんだよー」A児。そしてスコップを置き、バケツの上に山のようになった砂を両手でトントン叩いていると水がしみ出てきて、全体にしみてくる。「うわー！またでできたよー」とますます大喜びで大笑い。「水、どこにかくれてたんだろね？」という保育者の問いかけには答えず、また上から砂をかける。またトントン叩く。「でできたよ！」とまた水がしみ出てきたことを喜ぶ。また砂を上からかける。バケツに砂は山盛りになっている。そして、バケツの砂をそっと押さえて「かたいよー」と言うと保育者の手を引っ張って砂の上に置かせる。「さらさらの砂がかたくなったね。Aくん、いいことに気が付いたね！」と保育者。その様子を、型抜きでごちそうを作りながら見ていたB児とC児、D児も触ってみて、「すごい！」「プリンみたい！」「きもちいい！」と感じたことを口々に話す。A児は満足そうにその様子を見ている。B児とC児は、A児を真似て自分なりにバケツに水と砂を入れているが硬くなるころまではできないでいる。

#### 保育者の反省・評価

- 砂場での水遊びが本格的に始まって2日目の事例である。単純な動きを繰り返しながら、4歳児なりに砂と水の性質に気付いたのではないだろうか。なくなったはずの水がまた出てきたりすることは、A児にとって感動であったようだ。保育者はA児の感動に共感するとともに、水が砂に浸み込んでいくことに興味をもって探究するうちに、次の活動につながることを願って、「水に勝ったね！」と声かけをした。
- 砂場での単純な遊びの繰り返しの中で、水と砂の割合によって砂が固まることに気付いている。A児が遊びの中で学んだことが、意識としても残るようになり、「さらさらの砂が硬くなったね」と、保育者は言葉に置き換えた。
- この日のA児とのかかわりから、ちょっとした遊びの中での幼児の気付きを見落としてはいけないと感じた。

- ②「自分で分かってる」 6月7日  
砂場で遊んでいるA児。団子を作って見せてくれる。

「先生見てー」とA児。「Aくん、かたいお団子ができたんだね」「でも、水に入れたらなくなるよ」「そうなんだ。なくなってもまた作りたくなったらどうしたらいい？」と保育者。「砂をいっぱい入れればいいんだよ」「Aくんよく知っているんだね。誰か教えてくれたの？」「自分で分かってる」と答えるA児。

#### 保育者の反省・評価

- 「水に入れたらなくなるよ」という言葉を聞いて、前回の遊びが、A児の体験として残っていることを期待して「また作りたくなったらどうしたらいいの？」と声を掛けた。A児は保育者の問いかけに、考えることなく、「自分で分かってる」とさりりと答えた。前回の経験が、A児のものになっていることを確認することができた。

- ③「ソフトクリーム作ってあげるよ！」6月20日

保育者はA児に、「Aくん、E先生からAくんがおいしいソフトクリームを作ってくれるって聞いたんだけど」と言うと、A児はにっこり笑って、「ちょっと待ってて」と言う。A児はE保育者が言っていた通り、じょうごを持って帰ってくる。おもむろに砂の中にじょうごの口をさし、じょうごを立てると、手で砂をすくってじょうごに入れ始めた。そして、こちらから見れば『適当に』水を加え、じょうごの口を砂から抜くと、差し出した保育者の手の平に円を描きながら砂のソフトクリームがではじめた。「Aくんすごいね！」と言っている間に、バシャーと水が流れ出た。A児は上目使いに保育者の顔を見て、「びっくりしたじゃろう？」とはにかみながら尋ねる。保育者は、「Aくんてすごいね！誰が考えたの？」と尋ねると、やはりさりりと「自分で」と自慢げに答えた。

#### 保育者の反省・評価

- 保育者は、自分の目でソフトクリーム作りを見て、『今までの活動が活かされていること』を確認したいという思いから、このような言葉かけをした。担任も実際に目にすることで、E保育者の話にもあったように、『身体で絶妙な感覚をつかんでいる』と感じることができた。保育者が実際にやってみようとしてもなかなかA児のように手際よく作ることはできなかった。

#### 〈この事例を通しての考察〉

- ◎A児の三つの事例を通して感じたことは、保障され

た遊びの時間と場所の中で、保育者や友達とかかわりながら、主体的に遊びに取り組んでいることである。また、どの事例も水と砂の関係を遊びの中で自分なりに試していることである。日々の単純な遊びとも思える活動だが、繰り返していく中で、気付き、学び、遊びがどんどん深まったものになっていったのではないかと考える。

- ◎砂場で遊ぶA児に、保育者は様々な願いをもってかかわっている。A児は、年長児が遊んでいる隣で、繰り返し繰り返し水を流して遊ぶ中で、砂や水の性質に興味関心を持ち、自分で考え自分で行動に起こし、試したり工夫したりして遊んでいる。そして、保育者や友達に認められ、満足感を感じ、より探究心をもってイメージを広げて取り組み、そうした自分の思いを言葉に表現している。

このように、保育者の願いであるねらいは、保育内容の5領域にわたるが、遊びを通して総合的に達成され、発達していつている。

- ◎A児にかかわる砂場での遊びは、「人間関係」では自分で考え自分で行動する、「環境」では砂や水に触れ、性質や仕組みに興味や関心をもつ、「健康」では先生と触れ合い安定感をもって行動する、「言葉」では感じたり考えたりしたことを自分なりの言葉で表現する、「表現」砂と水の手触りを楽しみながら工夫したりイメージを表現したりするなどの5領域のねらいが考えられる。

そして、「環境」のねらいを系統的に見ていくと、砂や水に触れたり確かめたりしながら遊ぶ→砂や水の性質に気付き自分なりに試す→性質が分かりいろいろなかわりをする→性質の新たな一面を発見するなどが考えられる。このねらいは、実践例のA児の姿からも発達の姿として捉えることができ保育者は見通しを立てて言葉かけをしている。そして、他の領域の発達の系統性も同様に捉えることができる。

様々な遊ぶ子ども一人一人へのねらいを総合的にもちながらも保育者は系統的な見通しをもって指導にあたる必要がある。

- ◎水と砂の性質に気付き感動し、保育者の共感によってより興味を持ち、探究心をもって繰り返し取り組んでいる。繰り返し取り組むことで、気付きが自分なりの確信になり、「自分で分かっている」という言葉を発している。A児がこのように砂にかかわって繰り返し試すという行動に表すには、内面の育ちがあつてこそである。保育者の内面を理解した言葉か

けが重要である。

## 事例2 「缶蹴りをしよう！」

3年保育5歳児 5月～6月

子ども達は、年中組の終わり頃から「くつ取り鬼」を楽しんできた。進級後も大勢の子どもが自分から「いれて」と声を掛けて参加したり、互いにルールを知らせたりして遊んでいる。こうした中、5月の中旬にもなると、遊びに参加する子どもが急に減り始め、「違う鬼ごっこしようよ」「くつ取り鬼はもう飽きた」等の声が聞かれるようになる。この変容から、保育者は「新しい鬼遊びを提案することで、大勢の友達と楽しむことできる場もてるのではないかと考える。そこで、くつ取り鬼よりもルールが少し複雑で、かけひきを楽しんだりスリル感を感じたりできる、また、大勢の友達と広い範囲で伸び伸びと体を動かすことができる「缶蹴り」を、自ら選んだ遊びやクラス活動で取り上ることにする。

環境についてみると、園庭は決して広くはないが、大きな木々が多く自然が豊かである。また、大きなログハウスや土山、壁登りができる遊具等もあり、子どもがすぐに隠れることのできる場が多い。このような環境を生かし、園庭の中央に缶を置いたり、その側に捕まった子どもが集まって座れる木の椅子を準備する。そうすることで、子どもが缶を蹴ったりすぐに隠れたりしやすいようにするとともに、鬼役の子どもや捕まった子どもが園庭全体を見渡しやすいようにしている。

保育者は、缶蹴りに適した環境の中で、実態に即したねらいをもって活動を設定し展開している。大勢の友達と一緒に体を動かして遊ぶ楽しさを味わうとともに、ルールや遊び方について、それぞれに自分の思いや考えを出し合つて遊びを進めていった事例である。

### ①「缶蹴り知ってるよ！」（缶蹴り初日・組活動）

5月17日

クラス活動で缶蹴りをするを子ども達に知らせる。昨年度の年長児が缶蹴りをしていた様子を覚えていたり、家庭で経験したことがあつたりする子どもからは、「知ってる！鬼に見つからないように隠れて、缶を蹴りに行くんよ」「捕まっても、誰かが缶を蹴ってくれたら生き返るよ」等の声があがる。

保育者はこうした子どもの言葉を受け止めながら、ルールが分かるように動きを交えながら知らせていく。子ども達は笑顔で聞きながら「やってみよう！」

「早くしようよ」と言い、立ち上がる。初めは教師が鬼役になり、実際に動きながらルールを知らせるようにする。20数えたら探しに行くことを告げると、ほとんどの子どもがすぐ近くにあるログハウスの中や裏に隠れる。保育者が子どもに聞こえるように「どこかな?」と言いながら探していると、顔をのぞかせて笑ったり、「キャー」と声をあげて出てきたりし、次々と保育者に見つかる。アウトになる。保育者が缶を踏んでアウトにしているところへ、缶を蹴ろうと遠くの方から必死に飛び出してきて見つかる子どももいる。保育者に「アウト!」と言われると悔しそうにしたり、諦めきれない様子で缶を蹴ったりする子どももいる。こうして初めての缶蹴りは全員が教師に見つかるアウトになってしまう。

保育者が「1回目はみんな捕まってしまったから鬼の勝ちだね!」「どう?みんなやり方が分かったかな?」と言うと、缶を蹴ろうと飛び出して見つかった子どもは口々に「先生は缶の側にいてずるい」「1度は探しに行かないとダメだよ」と怒った表情をし、捕まって悔しいといった口調で言う。最後の方まで見つからなかった子どもは「先生、わたしどこに隠れていたか知ってる?」とうれしそうに言う。それぞれの気持ちや考えを受け止めながら、缶を踏んだらすぐに探しに行くことや、鬼に見つからないように捕まった友達を助けること、隠れる場所は全員が同じ場所ではなくてよいこと等を確かめた後、鬼役を保育者と子ども2人に増やして続きを行う。

すると、今度は鬼がいる後ろ側の水道の下に隠れたり、砂場のネットにくるまったりと、隠れる場所を工夫し始める。また、倉庫の裏から隠れながら様子を伺ったり、飛び出して缶を蹴るタイミングを計ったりする姿が見られるようになる。こうした様子を見て保育者は、捕まった友達を助けるために缶を蹴るという面白さを味わわせようと、「ちょっと向こうの方を見に行ってみよう」と意図的に鬼役の子どもを誘い、缶から離れるようにする。その時、鬼役の子どもとは反対側から飛び出した子どもが勢いよく缶を蹴る。一瞬、鬼役の子どもも捕まっていた子どももどうしていいかわからず動きが止まってしまうが、保育者が「しまったあ!缶を蹴られたから、捕まっていたみんなは復活!!」と悔しそうに叫ぶと、捕まっていた子ども達は大声で「やったー!」と歓声をあげながら駆けだし、再び隠れる。こうしてしばらく遊びが続き、終わって保育室に戻る時には、友達と「またしような」「わたし〜に隠れていたんよ」と言ったり、保育者に「明日も

できる?」と確かめに来たり等、楽しかった思いや次への期待を表す様子が見られる。

#### 保育者の反省・評価

○くつ取り鬼に飽き、物足りなさを感じている様子から、「缶蹴り」を組活動で取り上げたことは缶蹴りを知っている子どもも、初めての子どもも、遊びへの興味や意欲をもって楽しむ姿につながった。

○初め子ども達は、隠れることを意識して、保育者に見つからないようにするドキドキ感を喜んでいた。そのため、保育者が近付いて来ると「自分はここにいるよ」といった気持ちで顔をのぞかせて笑ったり、声をあげたりしていた。また、これまでの鬼遊びの経験から「友達を助けること」を意識している子どもは、缶を蹴ることだけに必死で、飛び出すタイミングを図ったり見つからないようにしたりしようという気持ちは感じられない。そのため、捕まったこと自体への不満を表情や言葉で保育者に表したと考える。こうしたそれぞれの気持ちを受け止めつつ、ルールを確かめたり、意図的に缶を蹴って助けることができる場面を作ったりしたことで、見つからないように隠れたり缶を蹴って友達を助けたりするという「缶蹴りの面白さ」を感じることができた。

○保育者が「どこかな?」とドキドキ感をもたせたり、「しまったあ!…」と悔しさを表したり、遊びの中心になって進めたりしたことで、「缶蹴り」を初めてした子どもも楽しさを味わうことができた。

○遊び終わった後の子どもの言葉や様子からは、「缶蹴り」に対する満足感や次への期待や意欲が感じられた。こうした気持ちを様々な場面で積み重ねていくことが、子どもの遊びや生活全体を充実したものにしていこうと考える。

#### ②「それじゃあ、おもしろくない」(選んだ遊び)

5月18日

登園するとすぐに、子ども達は「缶蹴りしよう!」と言いながら園庭に集まる。保育者も前日に引き続き、鬼役になって一緒に遊びを進めていくようにする。

普段はあまり集団遊びに参加しないA児(男児)も、前日の遊びが楽しかったのか喜んで参加しており、保育者と一緒に鬼役になっている。ほとんどの子どもがルールを理解して遊んでいるが、中にはまだ十分に理解できず、アウトになっても缶を蹴ったり、缶

を踏んだまま「～ちゃん、見つけた」と言ったりする姿も見られる。その都度、保育者が声を掛けながらルールが理解できるようにしていく。

こうした中、A児は缶を蹴られないようにと、ずっと缶の側にくっつくようにして立っている。しばらくしてA児が、遠くに見つけたB児（男児）に向かって「B児くん見つけた」と言ってすぐに缶を踏む。B児は、自分がアウトになったことが悔しくて、A児の側まで走ってくると「そんなに近くですぐに踏むのはいけんで」とA児にきつく言い押し合いになる。その様子を見て集まって来た数人の子ども達も「今のはセーフで」「Aくん、いけんよ」と口々にA児を責める。一方で、鬼役の子ども達は「見つけて缶を踏んだらアウトよ」「Bくんアウトアウト」とA児の行動を認める。A児は黙ってその場にしゃがみ込んでしまう。

保育者は、みんなでルールについて考えるきっかけにしたいと考え「困ったね、どうしてBくんは近くで踏むとだめなの？」と尋ねる。B児は「だって、近くで踏んだらすぐにアウトになるもん」と言う。聞いていた子どもは「じゃあ、見つからないようにして蹴ればいいが」と言うが、B児は「違うよ！」と再び怒って受け入れようとはしない。そこで保育者は「蹴るときには、すぐにアウトにならないように、こっそり蹴りに行くことが大事なんだね。」と、先程思いを言った子どもの言葉の意味が伝わるように知らせる。さらに「見つからずに蹴るのが缶蹴りの面白いところなんだよ」と缶蹴りの面白さや特徴をB児に伝える。A児は黙ってしゃがんだままではあるが、そのやり取りに聞き入っている様子である。そのA児も聞きながら問題点を振り返ることができるように、「ずっと缶にくっついていることはどうする？」と全体に投げ掛ける。すると、みんなは口々に「だめ！」「それじゃあ面白くない」等と言う。その声を聞きA児は顔を上げる。「じゃあくっつきすぎないようにするにはどうする？」とさらに尋ねると、しばらく沈黙の後、1人の子どもが「缶の周りに線を描いたら？」と言う。聞いていた別の子どもも「分かった。線を描いてその中に入らないようにしたら？」と言う。保育者は「そうかあ。それなら近付きすぎないでいいね」と考えを認め、A児に「Aくん、みんなが良い考えを出してくれたよ。もう一度これでやってみようよ」と声を掛ける。A児もB児も気を取り直して、再び遊び始める。その後、A児は缶の周りに引いた線を意識して中に入らないようにし、B児は隠れた場所からのぞきながら缶を蹴るタイミングを意識している様子が見られる。(意識

しているとはいえ、その後も繰り返し見つかって不機嫌になるが、A児や他の友達とぶつかることはない)

選んだ遊びの場で新たなルールができたことを、クラスの話し合いの中で伝え、翌日以降に全員がルールを共有できるようにする。

#### 保育者の反省・評価

○鬼役の子どもは「見つけてアウトにしたい」、逃げる役の子どもは「捕まりたくない」「缶を蹴って助けてみたい」という気持ちでいっぱいである。互いに必死になっていると、その思いがぶつかってトラブルになったり遊びが続かなくなったりすることはよくある。A児は、「友達を見つけたら缶を踏んでアウトにする」というルールは守っている。しかし、缶の側でじっとしておくことについては、どうするか決まっていないためB児にとっては納得がいかない。この場面では、B児に「鬼に見つからずに缶を蹴る」というルールや缶蹴りの面白さを知らせるとともに、A児が缶に近付きすぎているという問題点を解決できるようにみんなで考える場をもった。そうすることで、「缶の周りに線を描く」という考えが生まれ、A児、B児だけでなく、缶蹴りをしている子ども全員が新しいルールを共有して遊ぶ姿につながった。

#### ③「鬼が多すぎておもしろくない」(組活動2回目)

6月19日

選んだ遊びの中で、子ども達は互いに「缶には近付きすぎないよ」「線の中に入らないで」「遠くの人を見つけて缶を踏んだらアウトなんよ」等、これまでの遊びの中で考えたことや分かったことを言ったり、聞いたりしながら遊んでいる。ルールにも少しずつ慣れてきて、鬼役も保育者だけでなくやってみたい子どもが進んで鬼になり、交代しながら楽しんでいる。そこで、組活動では鬼役を保育者だけでなく「やってみたい子ども」が自由にできるようにし、いろいろな遊び方を経験する中で起こる問題について考え、遊びをさらに自分達で面白くして行ってほしいと考える。7～8人の子どもが鬼役になりたいと言って鬼になる。遊び始めると、隠れている子どもはすぐに見つかり、あっという間に遊びが終わってしまう。するとC児（男児）が「鬼が多すぎて面白くない！」と不満そうに言う。そこで、「Cくんが鬼が多すぎるって言っているけど、みんなはどう？」と問題を投げ掛ける。すると、みんなが集まって来る。

子ども「じゃあ、鬼を少なくすればいいが」  
保育者「どのくらいにするの？」  
子ども「10人とか」  
保育者「さっきは7人とか8人だったよ」  
子ども「じゃあ、ロッカーの半分ずつで（鬼役と逃げる役に）分かれたら？」  
子ども「男と女に分かれてみるのは？」  
保育者「男の子も女の子も12人だから、多くなっているよ」  
子ども「じゃあ、3人」「4人がいい」「いや1人。先生がなって」…

次第に思いつくままに人数をそれぞれが言い、考えがまとまらないため、保育者が「いろいろな考えが出たけどやってみないと分からないよね。7人や8人多すぎたんだから、今度は4人でやってみる？」とまだしたことのない人数を提案する。遊び始めるとC児は、見つからずに何度も缶を蹴って友達を助けることができ、うれしそうに遊ぶ。遊び終わり、「Cくん、鬼を少なくしたらどうだった？」と尋ねる。C児は「よかった」と満足そうに言う。「みんなはどうだった？」と尋ねると、他の子ども達は「もっと少ない方がいい」「先生だけがいい」等、様々な思いが聞かれる。

#### 保育者の反省・評価

- 遊びの回数を重ねるごとに、子ども達は遊び方やルールに関して友達と伝え合って遊ぶ姿が見られている。その中で、C児は鬼の数に問題意識をもった。保育者は問題点をみんなで話し合いながら、自分達が遊びやすいようにルールを考えていってほしいと思い全体に投げ掛けた。しかし、最初の鬼の数よりも多い人数を言ったり、思いつくまま数を言っている様子からは、C児が思っているほど他の子どもは人数について問題意識をもっていないことが分かる。C児からすれば、やはり「すぐに見つかりたくない」「見つかったことが嫌だ」という気持ちが強かった。そのために鬼はできるだけ少ない方がいいと考えたのだろう。鬼の人数を考えていくことも場合によっては必要であるが、この場面では、C児自身に対しても「簡単に見つからない場所を探す」気持ちをもてる援助をする必要があった。
- 遊びの中で子ども達が面白いと感じ、もっとこうしたいと考えを出し合って遊びを進められるように、問題点を話し合ったり考えを出し合ったりすることは大切なことである一方で、話し合う内容が子どもにとって分かりやすく、実感がもてるものでなければ

話し合っても一部の子どもにとってしか意味がない。また、意味のある話し合いにするためには、子ども達が十分に遊び込み、様々な思いを肌で感じ取っておかなければならない。この場面では、クラスの活動が2回目であること、まだまだ鬼になっている保育者とのかけひきを楽しんでいる子どもが多いこと、「この人数がいい！」とすぐに実感が湧きにくい問題点であったこと等を考えると、ある程度保育者が遊びやすい人数を設定し、やりたい子どもは順番に代わり合って鬼役をするという援助が必要であったかもしれない。そうして経験を重ねたうえで、今回のような話し合いが行われれば、また違った反応が見られるかもしれないと感じた。

- 缶蹴りにかかわる子どもの姿からは、自分が隠れたり友達を見つけたりするだけでなく捕まった友達を助けたり、そのために自分がどのように動けばいいのかを考えたりしながら、友達や保育者と一緒に遊ぶ楽しさを感じる姿が見られた。また、自分の思いや考えを言ったり、友達や保育者が言っていることを聞いたり、みんなで遊びを面白くするための考えを出し合ったりもしていた。さらに、遊びに取り組んで「面白かった」「またしたいな」という思いをもつ姿にもつながり、その後も子ども達にとって魅力ある遊びの1つとして2学期になっても続いた。

#### <この事例を通しての考察>

- ◎この「缶蹴り」にかかわってのねらいは、「健康」戸外で十分に体を動かして遊ぶ、「人間関係」ルールについて友達と話し合いながら遊びを進める、「環境」身近な物を取り入れたり、自分と鬼や缶との距離感を感じたりしながら遊ぶ、「言葉」自分の考えを伝えたり、相手の思いを聞いたりしながら伝え合う大切さを感じるなどが考えられ、総合的にねらいをもって指導している。事例の子ども達の姿からも回を重ねるごとにねらいが達成されていることがわかる。
- ◎事例から保育者の「缶蹴り」を取り上げて子どもの豊かな体験につなげようとしていることが分かる。子どもが経験するどの遊びや活動も、時期や年齢、子ども達の実態に合っているか、ねらいを達成するために必要な要素をもっているか等について吟味し、取り入れていっている。また、総合的な視点から、子どもの遊んでいる姿や、遊び終わった時の姿を思い返しながらいよいよ翌日に向けて反省評価している。



- ◎こうした姿が見られるようになるためには、保育者が鬼遊びへの発達段階に沿った系統的な保育内容を把握しているからである。そのうえで、「缶蹴り」の遊びの展開に見通しをもち、子どもの遊びに対する事実を捉えつつ、「こう育てほしい」「こういったことを感じてほしい」「この願いやねらいをもって援助していく必要がある。
- ◎「缶蹴り」の中で起こった問題を丁寧に取り上げて、話し合っ解決していつている。喜び、葛藤、満足感などを感じながら子どもたちは成長していつていることがわかる。A児とB児のルールの理解による意見の食い違いを、それぞれの子どもの心の動きを捉えながら他の子どもたちも巻き込んで話し合いによって対応していつている。自分の考えを話す、相手の話を聞くという活動だけではなく、思いやること、理解しようと心を開くこと、判断しようと思えることなど内面からの理解が伴わなければ解決には向かわないと考える。内面を捉えた指導するには、発達段階を把握し、適切な時期にタイミングを捉えた指導をしてこそ学びとして子どもたちに定着すると考える。

## 5 まとめ

- 子どもたちは主体的に環境にかかわり遊びを進めるが、その中には、様々な側面の保育内容が含まれており、クラス全体や一人一人へのねらいとして設定され、保育者の指導によって達成されていく。一つの遊びにも数多くの領域にわたるねらいや活動の展開があり、総合的な指導が必要である。保育者は場や時間の保障をしたり、共感したり、共に活動したり、方向性を示したりなどの指導が必要だと考える。
- 遊びや一人一人の取組への発達段階を踏まえた系統적인見通しが必要である。見通しがないと、適切な環境や言葉かけができず、「楽しく」「いきいきと」などと漠然としたねらいを設定し、ムードに流される保育になりやすいと考える。系統的な見通しをしていくには子どもの姿の読み取りを継続的にしていき、発達の姿を捉えていくことが重要であると考えらる。
- 子どもと共に遊びを展開するとき、総合的な発達を促す保育内容を常に考えていく必要がある。そして、子どもの姿を的確に捉える目が大切である。子どもは、自分なりの課題に繰り返し取り組むことで、気付き、学び、遊びが深まっていく。また、遊びの展開の中で課題を見つけて新たに取り組んだりする。保育者は、こうした活動の展開に合わせて実態に即したねらいを設定していく必要がある。共に考える、共に活動する姿勢で取り組むことが大切である。
- 子どもの心に寄り添いながら、総合的な指導をしていくには、保育者は常に子どもの内面を理解し、発達を見ていこうとする努力が必要である。活動を見つめながら、心の動きを推しはかることや、話し合う姿にも思いを向け、相手の気持ちを理解しようとする姿などを見取ることが重要である。こうした子どもの心の動き把握した指導に努めなければならないと考える。

## 引用文献

- ・大場牧夫・海 卓子・平井信義・本吉圓子・森上史朗編著（1978）「総合」とは何だろう フレーベル館 P8-P11
- ・倉橋惣三（1934）倉橋惣三選集 第一巻 の中「幼稚園真諦」1965年 初版としてフレーベル館 P75-P78  
（昭和8年、日本幼稚園協会保育講習会の講義が基になっている。初版は、昭和9年に東洋図書株式会社から出版）
- ・厚生労働省（2008）保育所保育指針解説書 フレーベル館 P20-P25
- ・文部科学省（2008）幼稚園教育要領解説 フレーベル館 P32-P34
- ・文部科学省（2002）「幼稚園教員の資質向上について -自ら学ぶ幼稚園教員のために」（報告） P3-P5

## 参考文献

- ・秋田喜代美著（2010）「保育のおもむき」 ひかりのくに
- ・秋田喜代美著（2011）「保育のみらい」 ひかりのくに
- ・加藤繁美・秋山麻実編著（2005）「5歳児の協同的学びと対話的保育」 ひとなる書房
- ・金澤妙子・佐伯一弥編著（2009）「保育内容総論」 建帛社
- ・岸井勇雄監修 井上恭裕編著（2008）「おもしろく簡潔に学ぶ保育内容総論」 保育出版社
- ・民秋 言・狐塚和江・佐藤直之編著（2009） 北大路書房
- ・森上史朗・大豆生田啓友・渡辺秀則編（2001）「保育内容総論」 ミネルヴァ書房